



Title	万葉集卷一抄
Author(s)	仲田, 應弘
Citation	懷徳. 1939, 17, p. 45-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89024
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

萬葉集卷一抄

仲田應弘

○

玉きはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむ其の草深野ふかぬ

中皇命

歌を作る者が知らず知らずに墮り易いのは背景や輪廓を克明に現はし過ぎて、感動の中心が朦朧になつて了ふことが多い様である。

この御歌では、タマキハルウヂノオホヌニと、おほまかに打ち出して、作者の眼には唯宇智の大野が、果てしなく續いてゐるのみで何らの雜念もないのである。タマキハルの枕詞も、二句を引立てて堂堂とをさまつてゐる。

ウマナメテアサフマスラムは、澤山の馬を連ねた臣下と共に朝露の著しい草野に一齊に踏み入つて鳥獸を追ひ撃つのであるが、その動作が説明せられずに生生と感じて來る。アサフマスの語、簡潔にして複雑な事象を把握してゐると思ふ。このラムの用法も適切で切切と御想像申上げてゐる様が、よく現れてゐる。五句のソノは句の勢を弱めてゐず、クサフカヌも朝フマスと共に、特に鋭敏な作者

の感受性と知性が感ぜられ、二句に對して五句は具體性を示して、力強い響きを與へてゐる様である。深いと云ふことは、高い處から見下した時に用ゐる語だと云はれた阪倉先生の御言葉が、この歌を味解する上に於て重要で、丘の上に武具嚴然と佇ち並んだ臣下の人人が、命令一下、朝露の光つてゐる窪地の深深と草の茂つた處へ、馬を踏み入れようとする様が、一層強められる様にも思はれる。

この御歌は、見る毎に力強く迫つて來ると共に、新鮮な感じを持つてゐる。

歌の新しいと云ふのは、近代語、新聞語を羅列したのみでは許せぬので、今迄に誰も作つたことのない珍しい歌も、字句の他に補足すべき感動と味ひがなければ、新味をもつた歌として許すことが出来ない。この様な私の考へ方からゆくと、永久に不變の新鮮な作歌精神を持つた御歌といふことが出来る。

○

熟田津に船のりせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

額 田 王

この歌は、初句の二について異説があるが方向を指したといふよりも、ニ於テの意に見る方がよい様に思ふ。五句も種種の説に迷はずに、味ひよいイマハコギイデナと字餘りにした方がよい。この歌は萬葉集中の佳作ばかりでなく、古來の秀作の様に云はれてゐるが私はさうも評價することが出来ない。一番に氣になるのは助詞のわざとらしく目立つことで、其の助詞にあまり期待を懸け過ぎた爲に

感動が浮いて了つたのではないかと思ふ。月マテバのバ、潮モのモが歌柄をぎこちなくしてゐると共に、二句のトを軽くしてしまつてゐるし、或る鬱陶しい感じを這はせてゐる様に思はれもするのである。

カナヒヌも直接な表現でなく、これを複雑な心象を示したものと見る説が行はれてゐるが、何か弱しい感じの伴うてゐることは否定出来ない。五句はこれでいいと思ふ。かういうて來るとつまらぬ歌の様だが、この歌の捉へた處がいいので、當時、夜の航海、特に暗の船出は戒められたものらしく、さうした習慣を表はしてゐて面白く、三句以下の表現には多少の難はあつても、月と共に潮がさして、船出に好都合になつて來た喜びが相當表はれてゐるのである。

○

吾が背子は假庵かりほつくらす草かむなくはこまつがしたのかやを刈らさね

中 皇 女

吾が背子は大兄皇子を指したもので、紀伊の温泉即ち牟婁の湯への途中での御歌であらう。澤山の従者と共に皇子自らも草を刈らうとなされてゐる様が見える。カヤナクハに御手慣れぬ様が解るし、四五句には、御兄を思はれる御心の朗かな少女ふりが力強く出てゐる。かうも打ち解けた御兄妹の間柄は表はされるものではない。二句で切つて、三句でハと掛つた手法は、型に填つたものであるが、ここではその型から溢れ出てゐる新しい力がある。それは四五句の精神力が響き返してゐる爲であら

う。コマツは小松と限定したものでなく、松のことだが、コマツの語感がカヤヲオカリナサイヨと關連して、一層愛らしい天真爛漫な皇女が現はれて來るのである。

ままごと遊びの様に思ふた説もあるが、さうした純真さはあるが、もつと御歳を加へられてゐた頃のことの様に私は思ふのである。(八月十三日)

